

新型コロナウイルス感染症対策下における小学校の 体験学習の実際

伊東, 俊昭
佐伯市立明治小学校

<https://doi.org/10.15017/6796309>

出版情報 : 生活体験学習研究. 21, pp.13-23, 2021-07-30. The Japanese Society of Life Needs
Experience Learning

バージョン :

権利関係 :



新型コロナウイルス感染症対策下における 小学校の体験学習の実際

伊 東 俊 昭*

1. 児童の実態

本校は、大分県佐伯市の中心部より車で約20分の校外にある児童数179人の小規模校である。学校の教育目標は、「ふるさとを愛し、学ぶ意欲と豊かな心を持ち、自ら気づき、考え、行動できるたくましい子どもの育成」と掲げている。

気持ちの良い挨拶ができ、とても素直な子どもたちであるが、全体的に自尊感情や自己肯定感が低く、主体性に欠ける傾向にある。令和元年度の県及び国の学力調査結果から基礎学力の定着が十分であるとは言えない。

2. 取組のねらい

学校の教育目標を達成するために、身近な地域の人・もの・ことを生かした主体的・対話的で、深い学びを保障することにより、地域に興味関心を持ち、地域の良さに気づき、ふるさとに誇りを持つこと、また、様々な人と出会い、様々な活動に挑戦することで、評価してもらう機会を仕組むことで、達成感・成就感を味わわせることにより、自尊感情や自己肯定感を高めることに繋げたい。

そこで、保護者や地域の方々の協力と支援を生かし、地域素材を教材化して、学習内容をより充実させることが必要となるが、新型コロナウイルス感染症の拡大により様々な制約がある中、できうる限りの対策を講じながら体験活動を伴う学習を積極的に進めていくこととした。

3. コロナ禍以前のこれまでの取組

令和元年度から総合的な学習の時間をはじめとして社会科や理科など各種科や特別活動を通じて、地

域のひと・もの・ことを教材化し、主体的・対話的で深い学びの機会を保障できるように地域協育コーディネーターと連絡・調整を行いながら、保護者や地域の方々に、ゲストティーチャーや学習サポーターとして授業や各種活動に参加していただき、児童の学びを充実させることを意識して取り組んできた。

校内研究としては、「自分の思いや考えをもち、自信を持って表現するとともに、互いに伝え合う子どもの育成」を主題とし、体験活動や行事で行ったことなどを表現と繋ぎながら「書く力」を身につけさせることを目指した。

4. 取組の実際

他市から通勤してくる職員が多い中、体験学習の支援としては本校教員が、弥生地区や佐伯市について興味・関心を持ち、地域を知り地域教材を生かした授業を行おうとする意識の醸成と支援を行うことが管理職の果たす役割の一つであると考えた。また、体験学習や校外学習を積極的に行うための支援体制の構築にも力を入れた。

特に、新型コロナウイルス感染症対策を行いながらの取組は、これまで経験のないことであり、市教委の方針のもと感染対策を行うとともに、変化していく状況をその時々で判断しつつ、保護者に情報提供し理解を得ながらの取組となった。

(1) 感染対策について

児童は、家で検温を行い、マスクを着用して登校する。登校すると玄関で手の消毒を行い教室に向かうこととなっている。健康観察を入念に行い、気になる児童がいれば、養護教諭及び管理職に報告し、

*佐伯市立明治小学校

組織的に対応するようにした。発熱があれば、保護者に連絡し迎えに来てもらうようにした。

校舎内は、担当を決め消毒を行ってきた。トイレの掃除は、児童は行わず職員が行い、教室は、常に換気ができるように冬でも窓を開け、休み時間は、遊ぶ学年を曜日で決め三密を避けるように対応することとした。

P T A会長の呼びかけで、保護者の有志が、夕方に校舎内の消毒を行ってくれた。毎日の検温やマスクの対応もきちんとなされ、マスクを忘れてくる児童は、殆ど見られなかった。P T A総会を初め様々なP T A活動を自粛していたが、保護者の学校への理解や協力は得られていた。

市の方針で、水泳指導の中止、運動会は半日開催、修学旅行は1泊2日で県内を回り、9月末まではバス遠足や社会見学を行うことはできないなど例年とは異なる状況下にあった。

(2) 具体的な取組

① 地域のひと・もの・ことを生かした様々な取組

【1学年・2学年】

○芋の苗植え・芋掘り体験（特別活動）

地域協育コーディネーターと学習サポーター1人



による芋の苗植えの指導・補助により、マスクを着用した上で、隣の人と間隔を開け2つのグループに分けて活動した。

話をせず黙々と活動する児童に多少の息苦しさを感じている様子も見られたが、天気も曇りで、久しぶりの外での活動に楽しそうに活動する姿が見られた。

【3学年】

○かけ算九九の確認（算数）



地域協育コーディネーター及び学習サポーター5人による児童のかけ算九九の確認を行った。学習サポーターの方たち

にも検温とマスクの着用をお願いして行った。4人ずつのグループに1人ずつ学習サポーターがついての取組だった。あまり大きな声を出さないように注意



しながら、学習サポーターの方たちが熱心に、児童



のかけ算九九を聞いてくれる様子が見られた。児童が、かけ算九九に意欲的に取り組む姿が多く見られた。

○社会見学（社会科）

地域協育コーディネーターの支援により見学場所を設定し、担任の意向を配慮しながら連絡調整を進めていただいた。また、佐伯市地域産業教育促進事業を活用して実施することができた。新型コロナウイルス

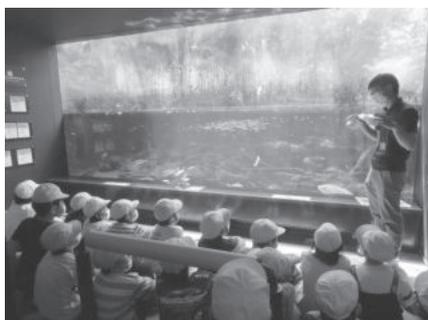


感染症対策を取りながらの見学であったが、畑など野外での活動の場合、児童が、息苦しく感じるようであれば、話をしないという条件でマ

スクを外すことを許可した。児童たちは、地域の事業所の方々の説明を熱心に聞きながら学習できていた。学校を離れ、久しぶりの校外での学習に生き生きと取り組む姿を見せてくれた。

【4 学年】

○川の自然を学ぼう（総合的な学習の時間）



他市から赴任してきた新任教員を鮎の養殖場連れて行き、総合的な学習の時間の取組として見学すること

をアドバイスしておいた。担任が、地域協育コーディネーターの協力の下、児童が、養殖場を見学し、鮎のチョン掛け漁を体験し、炭火で焼いて試食する予定であったが、前日に市内でコロナウイルス感染者が確認されたために、やむなく中止となった。

地域にある淡水魚水族館（番匠おさかな館）を見学した。特別に開館していただき、コロナウイルス感染



症対策として本校児童のみの入場とし、貸し切りの状態で見学させていただいた。施設の方に説明をしていただきながら、館内の水槽を静かに見学する児童たちは、興味深げな様子で、楽しそうに学ぶ姿が見られた。教室での学習とは異なり、図鑑ではなく生きている水生生物を直接観察することで、意欲的な学習となっていた。

近くの川で魚や水生生物を捕獲する取組を行った。



水泳が中止となる中、川の中に入り学習する子どもたちは、とても生き生きとしていた。距離を保ち、話をし

ないことを条件に、マスクを着用せずに活動させた。担任は、この取組をその後の防災教育につなげていった。

【5 学年】

○米作り（総合的な学習の時間・社会科）

地域協育コーディネーターが地域の方々と連絡調整して、例年通り田植えと稲刈りを体験した。児童たちは、間隔を開け、マスクを着用し、指導者の指示に従って取り組んだ。体を動かす活動なので、息苦し



いと感じれば、話をしないことを条件にマスクを外してよいこととした。マスクを着用したり、外したりしながらの活動だった。それでも、児童たちは、



「作業は大変だったが、楽しかった。」「また、やりたい。」などの感想を聞かせてくれた。特に、例年と変わらない取組となった。社会科の農業単元と関連づけることができる学びとなっていた。



○ショウガの栽培（総合的な学習の時間・社会科）

まず、担任と校長で、草刈り機を使って畑の草を刈り、その後、地域協育コーディネーターから連絡調整していただき、生姜を作っている地域の方々に耕耘機で畑を耕してもらい準備をした。5 学年児童が、例年通り生姜の栽培に挑戦した。

ゲストティー





を収穫し、道の駅で販売した。ショウガを使ったラスクを作り、販売する計画もあったが、コロナウイルス感染症対策として調理ができなかったため、実施できなかった。やむなく教育課程の変更をせざるを得なかった。

○野菜作り（総合的な学習の時間・社会科）

地域協育コーディネーターに下話をさせていただいた上で、弥生振興局職員や道の駅店長と打ち合わせをして、収穫した野菜の販売へと繋いだ。

まず、弥生振興局職員と道の駅駅長に、5年生に道の駅の説明と野菜の販売についての話しをしていただいた。

児童が、目的と方法について確認した上で、校長が、児童が収穫した野菜を道の駅に出荷し



チャーの説明を聞き、種ショウガを植え付け、水やりをしたり、草取りや追肥をしたりしながら一生懸命に育てた結果、例年になく豊作となった。大きくなったショウガ

た。子どもたちが作成したポップも販売する場所に掲示させていただいた。栽培した野菜を道の駅で販売し約6,000円の収入を得た。

【6学年】

○裁縫のサポート（家庭科）

7人の学習サポーターによりミシン縫いや手縫いの学習支援を行っていた。マスクをつけ、なるべく話しをしないように注意して取り組むようにした。5学年も、ミシンのサポートに入っていた。

初めはかなり気を遣いながらの取組だったが、黙々と活動をする児童の様子が印象的だった。学習サポーターの方たちも、コロナウイルス感染症対策を意識しながらも、積極的に児童を支援して下さった。



○社会見学（総合的な学習の時間）



佐伯市地域産業教育促進事業を活用し、6学年児童は、蒲江に行き、ヤマク海産で干物の製造について、屋形島の後藤緋扇貝でヒオウギ貝の養殖について見学を行った。帰りには、学校給食の指定工場である山之内食品に立ち寄り、パンの製造について見学した。

校長と担任で企画・計画し、地域産業教育コーディネーターの協力により、実施することができた。

バスや船を利用しての移動であったが、児童は、消毒やマスクの着用、必要以外の話しをしないことを守り





ながら行動できていた。

今後も継続していくには、地域協育コーディネーターや地域産業教育コー

ディネーターに協力していただくことで、校長や担任が異動しても取組を継続することが可能となる。

② 関係機関と連携した集団宿泊体験学習の取組

ア、5学年の取組 令和2年11月17日～11月19日

九重青少年の家における集団宿泊体験学習

【ねらい】

- ・豊かな自然とふれあったり、体験活動を行ったりすることで、体験知を高め、思考力・判断力・表現力を身につけさせる。
- ・集団宿泊体験を通じて、リーダー性、積極性、耐性及び仲間と協力する力を育む。
- ・仲間と協力し、最後まで取り組ませることで、粘り強く努力する力を育む。
- ・様々な活動を通して、学校での学習と関連付け思考・判断・表現させる。

【活動の実際】

○ヤマメ釣り体験

全員が、釣り堀でヤマメを釣ることができた。魚釣りを初めて体験する児童もいて、魚が釣れるととても喜ぶ姿が見られた。九重青少年の家で釣ったヤマ



メをさばき、燻製作りの下ごしらえを行った。夕食後、作った燻製を試食した。

○ランドアート

大分大学の准教授の指導により、木の枝や葉、木の実等を用いて、グループ毎に分かれ、大地に自由に表現した。個性あるユニークな作品ができた。



色と光について

話をしていただいた。児童は、仲間と協力しながら意欲的に取り組んでいた。

○化石掘り



坂本鉱業所に行き、化石掘りを体験した。社長の珪藻土や化石についての話を聞いた後、化石掘りに挑戦した。児童は、一生懸命に化石掘りに取り組んでいた。化石が出てくると大き

な歓声を上げて喜ぶ姿が見られた。児童にとっては、貴重な体験となったようだ。

○男池散策

男池に立ち寄り、散策した。男池の水を試飲したり、記念撮影をしたりしながら、原生林の残る大自然を体で感じながら散策を楽しむ様子が見られた。九重青少年の家職員の



説明を聞きながら、自然の素晴らしさや不思議について学ぶことができた様子だった。

○火起こし体験

専門家や九重青少年の家庭職員の指導のもと、火起こし器を使って火を起し、たき火をする体験を行った。グループ毎に仲間と協力して種火を作る作業に熱心に取り組む姿が見られた。夜は、残り火を使って、マシュマロを焼いて食べる体験も行った。



○その他の活動



他にも天体観測、アスレチック、自然観察、ドングリアートなど様々な活動に取り組んだ。天体観測では、

火星や木星、スバルなどを天体望遠鏡で見たり、星座を確認したりした。アスレチックは、仲間と協力して様々な器具に積極的に挑戦する姿が見られた。自然観察は、施設の指導主事が、水について実験したり、植物や魚を観察したり



児童に体験させながら説明をしてくれた。児童が、ドングリアートにも熱心に取り組む姿が見られた。様々なプログラムに取り組むことで、自然

に対して興味関心を高めたようだった。

【この取組の成果と課題】

全体的に自己肯定感が低く、自己表現することが苦手な子どもたちだったが、九重青少年の家や坂本鉱業所、男池など阿蘇・久住国立公園の大自然の中で非日常的な様々な体験活動を行うことで、仲間と協力し合いながら生き生きと活動できていた。活動を通じて少し自信を持ち、自分の思いや考えを発言しようとする主体的な姿が見られた。

その後の学校生活の中でも、挨拶や返事がよくなり、積極性が見られるようになった。また、一部の子どもたちは、学習に向かう姿勢もよくなり、家庭学習にも積極的に取り組む姿が見られるようになっていった。学びに対する意欲が高まりつつあった。

課題としては、この取組のねらいや各活動の内容を十分に理解できていないと効果的な指導や支援を行うことが困難であり、来年度は、今年度の振り返りをもとに担任及び引率教員で活動内容の精選と指導・支援のあり方について十分検討し、共通理解した上で実施することが課題となった。

イ、6学年の取組

九重青少年の家における集団宿泊体験学習 令和3年2月3日～2月5日

【ねらい】

- 仲間と協力し、あらゆる問題を解決する。友達との絆を深める！
- 冬の自然に思いっきり触れ、心から楽しむ
- 整理整頓、道具や部屋の片付けを徹底する
- 「5分前行動」を心がける。全体のことを考えての行動を！

テーマ：「気づき・考え・行動する」

【活動の実際】

○火起こし体験

外部講師の指導による火起こし器での火起こしに



挑戦した。グループごとに協力し合いながら、一生懸命に種火作りに励んだ。種火を作るため

に必死に頑張る仲間に、声援を送ったり、風を防ぐために手を当てたり、何とか火を付けようと頑張る姿が見られた。どのグループも、メタルマッチで火をつけて、焚き火の仕方を学習した。日頃、あまり使うことのない火について体験することができた。

○星空観察

寒い中、防寒着を着て、マスクも着用し、天体望遠鏡を使って星空を観察する



ことができた。スバルやアンドロメダ星雲などをはじめ、冬の星空について学ぶことができた。児童たちは、歓声を上げ、宇宙の雄大さに感動したようだった。学校では、できない夜の星の観察を体験できたことは、理科に対する興味や関心の喚起に繋がったと考える。

○朝の集い

朝の集いで、ラジオ体操を行った。寒い中、子どもたちは、元気に体を動かして目を覚ますことができた。寒さに震えながらも、しっかりと体操できていた。体操の後、施設内を散策し、山や空、雲の様子を観察させた。日常とは異なる環境の中で、自然



を体感する機会を最大限に生かし、自然に対する関心を高める取組とした。

○スキー体験活動

大分スキー連盟の方々や九重青少年の家の職員に講師をしていただき、1日スキーの練習に励み、プルークボーゲンですべることができるようになった。仲間

と協力し合いながら練習したり、リフトに乗ったり、熱心に練習したりする姿が見られた。



殆どの児童が、スキーを体験するのは始めてだったが、リフトで上まで行き、コースを滑り降りてくることができた。児童たちは、素敵な笑顔だった。

○ランドアート

大分大学の2人の准教授に講師をお願いし、ランドアートに取り組んだ。冬なので花や木の実などは殆ど見られず、枯れ葉や枯れ木、蔓などを使って表現した。木に蔓を絡ませたり、霜柱を使ったり、様々な工夫をしながら大地や岩などをキャンパスとして思い思いに表現活動に取り組んだ。グループ毎に、記録した画像をもとに表現したことについて発表し



合った。自然とふれ合いながら日頃味わうことができない体験をすることができていた。

【この取組の成果】

日ごろから気持ちのよい挨拶ができ、生活規律も授業規律も整っている学級の児童であるが、その力をさらに伸ばすことができた3日間であった。火こし体験やランドアートなど専門家や大学の准教授の指導による本格的な取組を行うことで、活動を充実させることができ、児童も熱心に取り組む姿が見られた。

特に、新型コロナウイルス感染症対策を行いながらの活動であったが、スキー体験活動では7人の講師による丁寧な指導により、児童たちは、真剣に話を聞き、一生懸命に練習に取り組んでいた。その結果、全員がリフトに乗り、コースを滑り降りることができるようになり、達成感・成就感を味わわせることができたことは、児童の自己肯定感を高めることにつながったと感じている。

特別な活動以外でも、仲間と一緒に入浴したり、食事をしたり、終身までの時間を過ごしたりすることを通じて、仲間意識がさらに高まり、児童同士、担任と児童の関係性が深まったように感じている。学校に戻ってからも、学びに向かう姿勢が更に向上した。

この取組は、大分県教育委員会が進める「豊かな体験活動推進事業」の取組で、大分県教育委員会社会教育課が実施したアンケート調査からは、本校6学年児童は、以下のグラフが示す結果となった。この結果からも、体験活動を行うことにより様々な能力が伸びることが期待できることが明らかとなった。

新型コロナウイルス感染症対策を行っている状況の中で、学校生活及び家庭生活で様々な制約を受けながら過ごしている児童にとって、様々な対策を行いながら体験活動を積極的に仕組んでいくことは、とても重要かつ必要なことであると強く感じている。

③ ICTを活用したリモート授業の取組

ア、佐伯市立松浦小学校との交流学习（4学年：総合的な学習の時間）

4学年児童は、1学期から地域の川の自然や防災について調べ学習を通してまとめてきたことを佐伯市立松浦小学校の4学年児童に対して説明を行った。

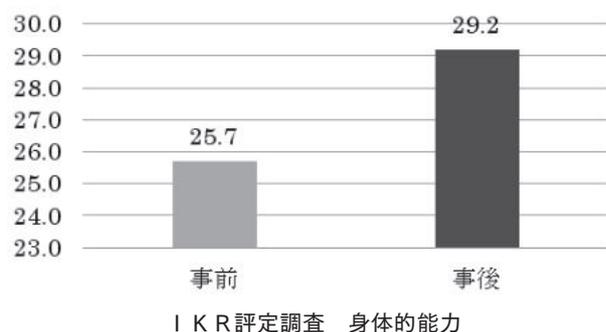
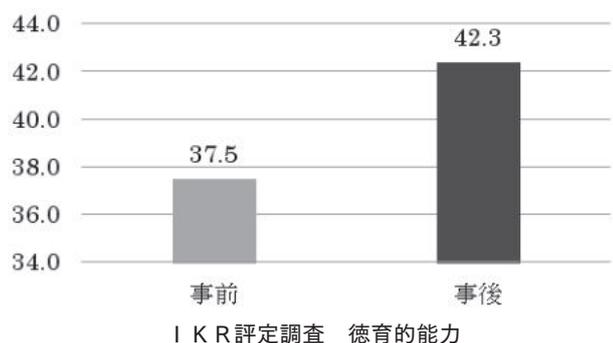
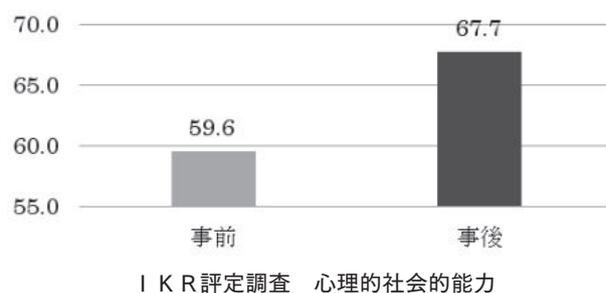
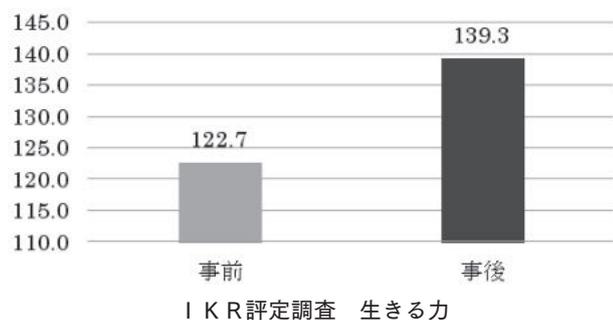
また、相手校の児童が調べた海についての説明を熱心に聞く姿が見られた。授業後に担任が、「リモート授業により他校の児童と学習した



ことについて情報交換することは、自分たちの学級内で発表し合うよりも、相手意識と緊張感

をもってより真剣に学習できていた」と話しをしてくれた。

コロナウイルス感染症対策中の学習形態としては、効果的な取組であると感じた。今後も交流学习を継続



していきたいと考えている。

イ、佐伯市立本匠小学校との交流学习（6学年：英語）



6学年児童は、佐伯市立本匠小学校の児童とリモートを活用した交流学习を行った。昨年度から行っている

のでALTと両校の担任が対応しながら、合同で英語の学習を行った。他校の児童との交流により適度な緊張感を持ちながら、学習した英語を使いながら楽しそうに会話をすることが見られた。

ウ、オーストラリアとの交流学习（6学年：総合的な学習の時間）

10月7日に、オーストラリア人との交流学习を行った。簡単な自己紹介と運動会で行った「明治小よさこい」の表現をICTの活用によるリモート授業として行った。子どもたちは、少し恥ずかしそうにしながらも、それ



戦する姿を見せてくれた。

終わった後に、児童に話を聞いたら、「すごく緊張した」「ドキドキしたけど通じたので嬉しかった」「もっと話してみたい」などの感想を聞かせてくれた。



3月10日に、2度目の交流を行った。一人一人が、自己紹介を行った後、学校行事や総合的な学習を通して学んできたことをもとに、各グループでまとめた佐伯市や大分県のことについて英語で紹介した。



担任やALTの指導や支援を受けながら伝えたい内容を英語でポスターにまとめ表現した。6年生は、これまで学習してきた成果を発揮しながら、意欲的にオーストラリア人と会話をする姿が見られた。



令和元年4月に行ったアンケートでは、5学年児童の約40%が、英語の学習に苦手意識

を持っており、英語を学ぶことに興味・関心を持っていないことが明らかとなった。しかし、卒業前に行ったアンケートでは、「中学生になっても英語の学習に頑張りたい」という項目で95%の児童が、肯定的な回答をしていた。

このことから、目的意識と相手意識をもって、学習に取り組み、学習の意義と楽しさを実感することで、主体的に学習する姿や仲間と関わり



合いながら熱心に学習する姿が見られた。ICTを活用し、他校や他国の人と交流する学習を仕組むことで、児童は、英語の学習に意欲的に取り組むことが確認できた。

④ 地域の方たちとの交流（特別活動）

特別養護老人ホームの方々に元気を出していただくこと、中学年と高学年児童が、運動会で行った表現運動を行うことを計画した。新型コロナウイルス



いただき、実施した。

入居者と職員は、施設の庭から堤防で踊る児童の様子を見てくださった。児童たちは、張り切って表現する姿を見せてくれた。6学年児童は、施設の門の近くまで行き、距離をとり入居者と声を交わした。



5. 取組の成果と課題

コロナウイルス感染症対策を行いつつ、保護者や地域の方々の理解と協力を得ながら、例年と変わらない取組を積極的に行うことで、子どもたちは、ストレスを多く感じることなく学校生活を過ごしてくれたように感じる。その根拠として、昨年度に続き不登校児童は、1人も確認されなかったことや生活指導上の大きな問題も起きなかったことが挙げられる。

地域のひと・もの・ことを教材化した学習を仕組むことにより、児童が、地域の自然や産業、文化などに興味・関心を持ち、意欲的に学ぼうとする姿が見られた。少しずつ、主体的な学びが見られるようになってきた。体験したことや見学して気づいたこと、理解したことや考えたことなどをまとめたり、発表したりする取組を通じて、仲間と協力したり、対話したりする機会が増え、深い学びに繋がっていく。

また、保護者や地域の方々の協力・支援によって学習内容を充実させることができた。さらに、そのような取組が、教員の学びの機会となっていた。

学校行事や体験活動、総合的な学習の時間で学習してきたことを交流相手に伝える機会を設定することで、自分の思いや考えを表現し相手に伝えることを実感させることで、人と対話することの楽しさや、

達成感・成就感を味わわせることができた。

とりわけ、6学年の取組として行ったオーストラリア人とICTを活用した交流学习では、総合的な学習の時間でまとめた佐伯市や大分県のよさについて英語で表現することで、海外の人と会話が通じた喜びと英語に対する興味・関心が高まった児童が多く見られた。アンケート調査からもその裏付けとなる結果が得られた。

また、令和2年度12月に行った学力調査では、6学年児童は、国語、算数、理科ともに市の平均及び全国の平均点を上回る結果となり、このことから、学習意欲や基礎学力の向上が確認できた。様々な体験活動を通じて、自尊感情の高まりとともに、学びに向かう姿勢と学習意欲の向上が期待できることが確認できた。担任からも、「取り組んできた体験活動を通じて、子どもたちの姿勢や意欲、日常の授業や家庭学習への取組に変化が現れ、学力調査の結果につながっている」という話を聞くことができた。

課題としては、カリキュラムマネジメントの観点から授業時間が必要以上に延びないように気をつけることが大切であり、取組を効果的・効率的に行うために、事前の打ち合わせをしっかりと行うことが必要である。そのためには、教師がきちんと実施する教育活動のねらいや学習内容を明確に示す必要がある。

また、事前の打ち合わせや振り返りの時間をいかに確保するかも課題となる。成果が認められる取組を持続・発展させていくために、教育課程に位置づけるとともに、引き継ぎをしっかりと行うためには、地域協育コーディネーターにも引き継ぎの支援を協力していただく必要がある。その際、児童と教員が主体となって取り組める実践としていくことが大切であり、課題と成果を明らかにし、改善点をきちんと伝えていく必要がある。

学校の恒例の行事や取組となると、地域協育コーディネーターやゲストティーチャーに任せっきりとなったり、教員と児童が受け身になったりしがちで、目的意識や主体性に欠ける取組となる傾向にある。また、支援や協力をしていただくことが当たり前となってしまう、教員・児童ともに感謝の気持ちが薄れてしまう場合もあるので、常に、PDCAサイクルで取組の振り返りと工夫改善を行っていくことが

必要となる。その際、地域協育コーディネーターと意見交換を行うことで取組の効率化や内容の充実に繋げていくことが期待される。

また、地域協育コーディネーターと同様に、地域産業教育コーディネーターも大きな役割を果たしてくれた。見学先の事業者との連絡・調整や交通費の補助は、教師や保護者にとっても大きな支援となっている。今後も、この2つのコーディネーターと積極的に連携・協力を行い、更なる教育内容の充実に図っていく必要がある。

I C Tを活用した様々な取組が行われつつある中、結局は人が人と繋がることで、授業をはじめとする教育活動の充実が図られることが明らかとなった。新型コロナウイルス感染症が広がる中、公共交通機関を利用した移動や人と人との接触が制限される状況下において、Z O O Mによる打合せやリモートによる交流授業などを行う機会が増えてきた。

地域協育コーディネーターのネットワークが市内、

県内、全国と広がっていくことができれば、I C Tを活用した地域外の社会見学や校外学習をより効果的・効率的に実施できる。そのことにより、教師の負担の軽減と高学年児童の社会見学や体験学習などの充実が期待できる。

一方で、直接目で見て、耳で聞き、臭いをかき、食べてみたり、触ったりしながら体感を通して学習していくことが、今後、益々大切になってくると予想される。価値ある体験を通じて、児童の感性を豊かにし、自分の思いや考えをもち、表現できる力を養うためにも、地域に開かれた教育課程の作成とカリキュラムマネジメントをしっかりと行うことにより、限られた場所や時間の中で、いかに効果的な体験活動を仕組んでいくかを模索していくことが、今後の大きな課題である。

この、大きな課題の解決のためにもこれまでの取組を、様々な形で発展・継続させていきたい。